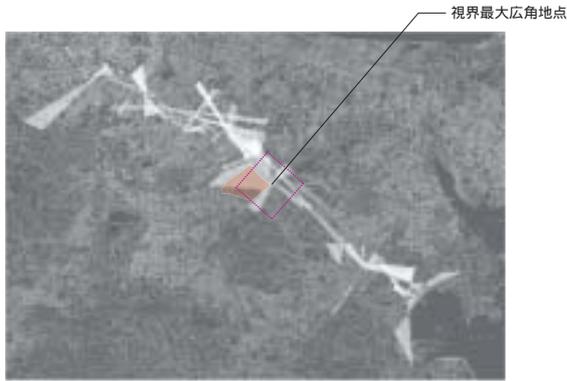
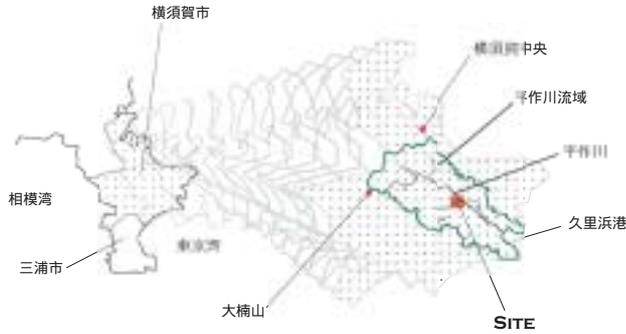


## 計画の背景・目的 01

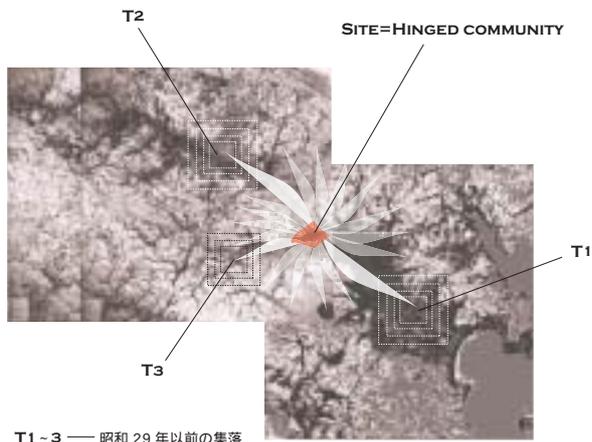
当該流域における土地区画整理等の宅地開発及び工場用地開発は、平作川やそれがつくり出した地形とは関係性を持つことなく開発が行われた。それにより、都市河川化した平作川は、幾度も氾濫を起こし、水害をもたらした。そして、平作川は護岸改修や河床改修を経て、当該流域内の住民の生活とは縁遠い存在となった。



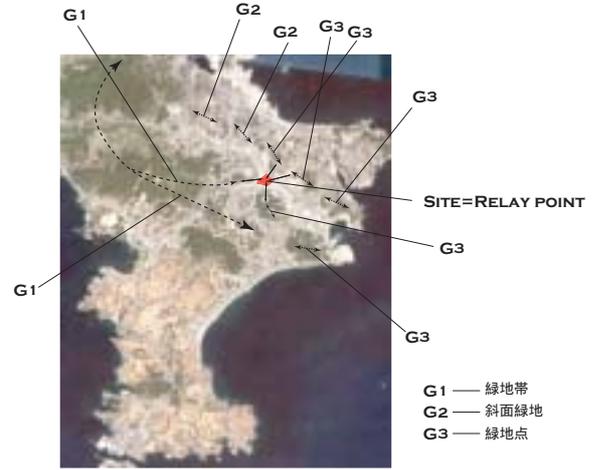
可視領域図

## 計画の背景・目的 03

河川を扱う際、懐古主義的に水辺を扱うわけでもなく、また、機能主義的に扱うわけでもない。そして、河川=自然という単純な構図に陥ることなく、計画することこそ、河川という都市機能に新しい存在意義をつくることができると考えられる。そしてそこには、新しい水辺空間のイメージが生まれる。



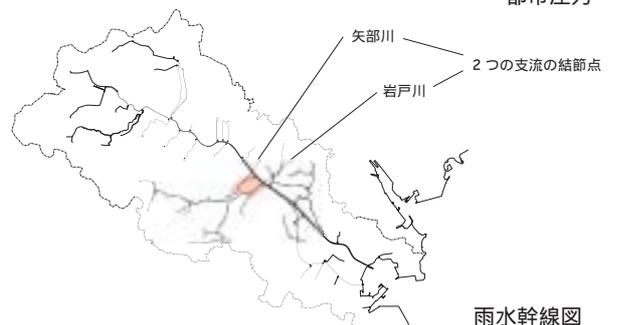
地形表現図



緑地分布図

## 計画の背景・目的 02

本計画は“かわ”の持っている特性や機能を理解し、活用することで“ひと”と“かわ”の新しい関係を構築することを目的としている。まちの変化や生活習慣の変化に伴い、“ひと”と“かわ”の接点は薄れ現在に至っている。このような状況のもと、この2者を結びつけることによって、当該流域における今後の“まち”のあり方を検討するきっかけをつくることは重要であると考えられる。また、そのためには“かわ”の機能や役割を再構築する必要がある。“まち”のなかを流れる“溝”化した平作川を積極的に利用していくとともに、都市の防御装置としての治水能力を兼ね備え、周辺の自然環境とも呼応した新しい都市の機能を当該流域に創造することも必要であると考えられる。



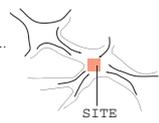
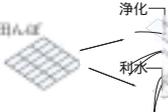
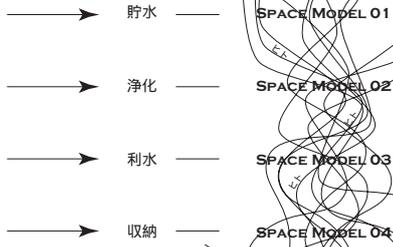
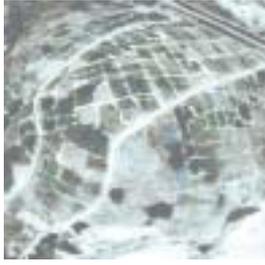
雨水幹線図

Program

それは呼吸と吸気の大地、入る前の状態と出たときの状態が変化するフィルターとして..

水理システムに関する機能

川の水を様々な状態に置き換えることで水にまつわる4つの機能を創り出す



護岸のあり方再考

まちとのつながり再考

地表を覆っていた“水”の知覚

水に対する理解、大地と人と水の関係を再構築

地形に沿った移動の発生

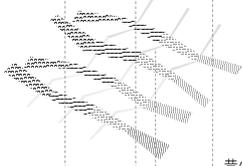
↓

流域に住まうことの意味

教育的利用に関する機能

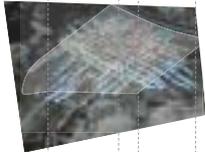
計画敷地を水と大地をテーマとしたネイチャスタディの場として利用する  
当該流域内に存在する小学校の総合的な学習の時間において、生きた教材として計画敷地を活用する

Site Composition



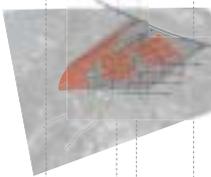
ヨコイトとタテイトの体験

昔の土地の記憶と水の地形的關係性を傍観するような空間体験の創出

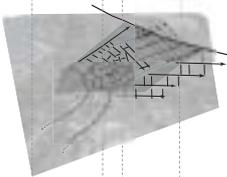


ベクトルとメッシュ

30m×30mのタテイトとヨコイトで構成されたメッシュを被せる

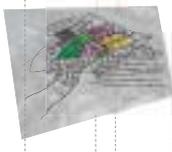


田んぼと水のベクトルより  
地形を生成する



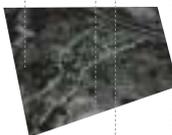
田んぼと水のベクトル

河川と取水経路をベクトルに変換 水と地形の關係を抽出  
河川・地形・生活の3者が拮抗した姿を良好モデルと評価する



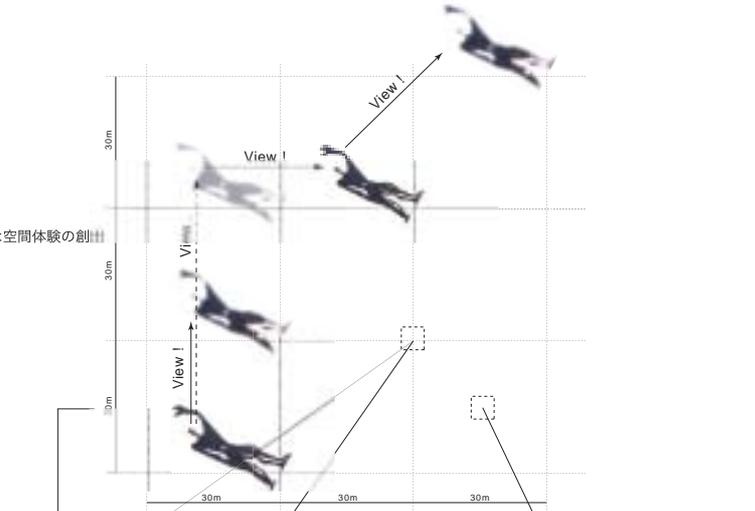
田んぼと敷地

敷地内にあった田んぼの位置をトレースする 昔の土地の記憶を呼び起こす



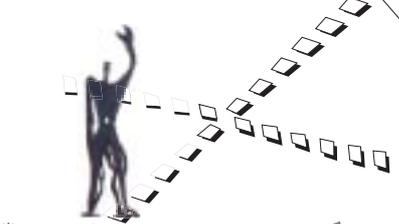
昭和の田んぼ

昭和44年頃まで存在していた当該流域最後の田んぼ 最後の水辺空間



人の表情や仕草が分かる距離 = 認知距離 → 人の表情がその地点でのアクティビティのインデックスとなる → 風景の近景化

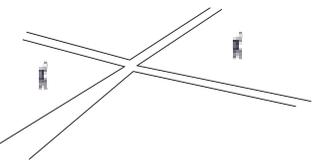
ex.01 石と石の交差



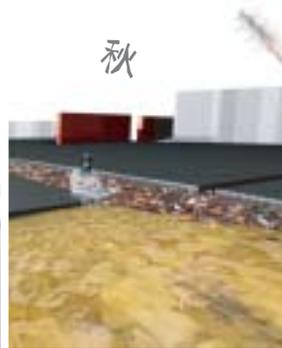
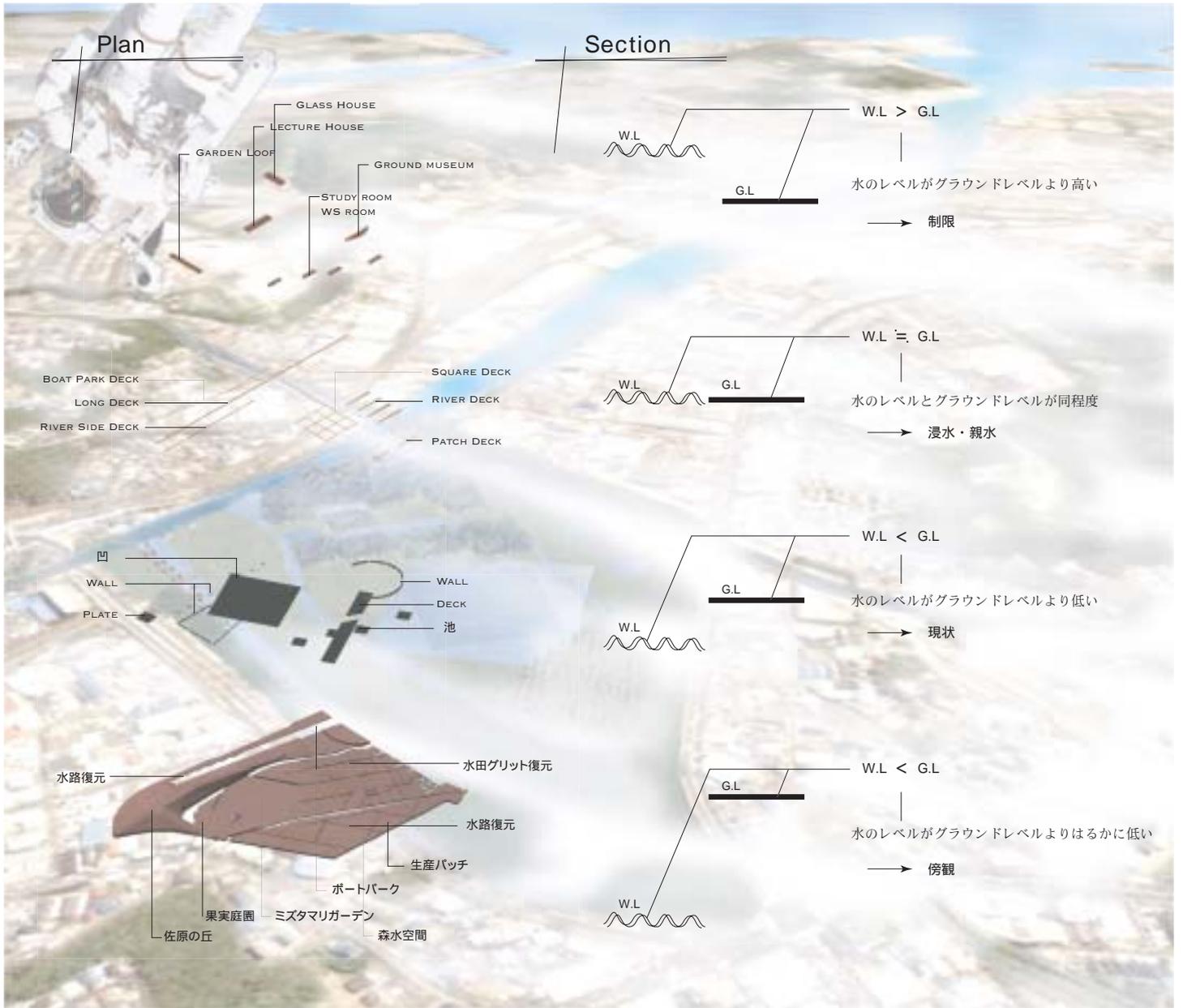
ex.02 芝と樹木の交差



ex.03 プレートの狭間



メッシュを知覚させることで空間体験のリズムをつくり出す めぐる体験の創出



Lecture House



Glass House



生産パッチ



地底ミュージアム



